

書評



書評

貝塚茂樹著

『中国の伝統と現代』

中嶋 嶺雄 評

(東京外国語大学助教授)

非常にいやな言葉だが、「中国ブーム」といったものが、昨今のわが国にはたしかに存在した。一方、わが国の知的風土のなかには、依然として中国にかんするタブーが表向きには存在している。この二つの事実、矛盾するものであるが、いずれにせよ、中国をきわめて安易に論ずるといふ軽薄な風潮だけが残されているように思う。たしかに、中国のことなら、誰もがなにかを語ることができる。それは大いに結構なことなのだが、語るからには、中国の民族的個性や伝統を知るべきである。だが、世の中すべて軽快浮薄な今日、

きわめて恣意的な昨今の新聞記事をななめ眺みした程度で、中国が語られることが多すぎはしないか。

孔子批判や秦始皇禮讚が中国で起っているから、こんなことをいうのではない。もっと本質的なところで中国を考えようとする姿勢を持することは、日中国交回復後の今日、中国にたいする一つの礼儀でもあると思うのである。

貝塚茂樹氏の啓蒙的な著作のなかで、本書ほど魅力的なものはないように思う。本書は氏の講演や談話を集めたものだから、柳成土は、いささか軽いものであるが、とにかく活き活きしている。そして、中国古代史の碩学が、毛沢東体制下の中国にたいして抱いてきた感懐が、一つの山を越えたときのような爽かさで率直に出ていて、共感を呼ぶ。「中国の歴史を考えると、中国の尺度で中国をみなければならぬのです」という平凡な言葉に含まれる意味の大きさをわれわれ

は考えねばならないが、この辺のことが意外に世間一般にはつかまれていない。だから、一方では、中ソ関係を見る場合にも、スマルトに計量される国際政治上の戦略だけで判断されがちだし、他方では、毛沢東や周恩来の言葉を表向きに解釈するだけで中国を見てしまふ。

私は、最近もある處で中ソ関係の危機的な諸状況を指摘したら、一笑に付されてこちらが驚いたが、「いま毛沢東思想によって人民戦争論がとなえられていますけれども、この人民戦争というものは、つまり民衆の異民族に対する反抗意識にもつくものです」という著者の意見は、きわめてリアリティに富んでいる。中国の北方異民族との同化融合の流動的な抗争の過程のなかで、「中国に直接にぶつかる北方民族の同化が進行してゆくそばから、その後には別の未開化の北方民族が勃興して、新しい脅威となるのは、北方民族史の常識である」という鋭い史観がそこにある

からである。

著者は、本書のなかで「中国の民族意識」

の解明に力を注いでおり、民族意識の把握を通じて革命と伝統、連続と非連続の問題を考察しようとしている。そして、この点で著者は、「私は、現在の中国の民族意識をも含めて、やはり基本的には底流として、古代に形成された民族意識の原型がその底にあるというふうに考えます」と述べ、世界帝国としての中国統一の歴史哲学に基づく対外関係を規定した「五服説」から導かれる朝貢関係にふれて、「いわゆる大國主義ですけれども、いまの中国政府にも、その残存があるのではないかという気がいたします。かつて日本と中国との覚書貿易の交渉でまず日本が四原則を認めれば具体的な交渉に入らぬという態度は、周辺民族が中国の文化的支配を承認することを前提として、朝貢関係に入るのとよく似ています」と語っている。

このように、革命のなかに伝統が、非連続のうちに連続が生きていることについては、今日の中国共産党も中国農村社会にみられた封建的なジェロントクラシー（老人支配）と

共通のパターンをもっているという問題提起にもつながってゆく。そして、毛沢東にたいする著者の根本的疑問は、「革命運動家は、革命政権ができたときに革命政治家として生まれかわらねばならぬということである」という言葉によって示されていると思うが、このことは、「馬上で天下を統一することより「馬上で天下を統治する」ことを重く視、「創業」より「守成」を重んずる中国的な政治思想を毛沢東が超克し得るかどうかという問題なのでもある。

本書には、「どうも日本の歴史家は自國の悪口を書くのに熱心であります」とか、「中間問題については、ですから、両方の大國意識がもとにある」とか、「日中関係というものの、いろんなことがありますけれども、私は日本の政治家や國民が賢明であるならば、そして中華人民共和国の政治家が賢明であるならば解決できない関係ではないと、そういうふうに着信しているわけでありませう」とかの発言があって、いかに日本人としての中國観が語られていて心強い。

「こんどの文化革命のなかに、中國古来の

儒教的、道徳的な考え方がはつきりあらわれている」と指摘する著者が、林彪異変以来、孔子批判にいたる過程に照して、中國の「革命」を現時点でどのように見ているのか、文化大革命初期の紅衛兵の出現にたいし、「ひよっとすると、せつかく二十余年の血のじむ苦闘によって達成した革命の成果である中國共産党の組織を根底から動揺させる危機に追いこむことになるのではないかという危惧の念を強くいだいた」という著者の懷疑はおそらくさらに増幅しつつあるのではなからうか。

ともかく、本書は、『毛沢東伝』（岩波新書、一九五六年）によって出発した著者の、今日の中國にたいする評価の航跡を知るうえでも興味深いものである。

本書には、加藤周一、A・トインビー、O・ラティモア／岩村忍の諸家との談話も含まれているほか、京都大学退官記念講演「中國古代史研究四十年」が収録されており、とくに退官記念講演はやはり味わい深いものである。